

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24年 5月 30日現在

機関番号：32641

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009 ～ 2011

課題番号：21520450

研究課題名（和文）紀元前三千年紀末から二千年紀初めにおけるシュメール語の関係節の研究

研究課題名（英文）A Study on the Sumerian Relative Clause Constructions

研究代表者

唐橋 文 (KARAHASHI FUMI)

中央大学・文学部・准教授

研究者番号：80453679

研究成果の概要（和文）：

前三千年紀末から二千年紀初期のシュメール語テキストにあらわれる関係詞節構文の類型化、関係代名詞の有無、関係詞節をめぐる語順の考察などを行うことができた。また、この研究の副産物ではあるが、研究過程で収集した他の従属節の構文についてもいくつかの考察を加えることができた。さらに、この研究を始めるや否やコーパスの必要性を感じ、中断していたシュメール語コーパス作りの作業を再開し、試験的なコーパスを完成させた。

研究成果の概要（英文）：

Using data collected from Sumerian texts from the end of the third millennium and the beginning of the second millennium B.C., I classified relative clause constructions into several sub-groups, addressed the question of whether Sumerian possesses relative pronouns or not, and studied word order involving the relative clause. Upon starting my research, I recognized that having a corpus would be necessary for efficient grammatical study and resumed the building of a Sumerian corpus.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：シュメール語、統語論、関係詞節、縮約関係詞節、付加不定詞句、左方転位、従属節、コーパス

## 1. 研究開始当初の背景

(1) シュメール語文法は 19 世紀末の研究開始以来これまで形態論が中心であった (Poebel 1923; Falkenstein 1964; Thomsen 1984; Attinger 1993; Edzard 2003 ; Michalowski 2004 など)。関係詞節について

も同様で、節を名詞化する拘束形態素（動詞の定形あるいは不定形に付加される接尾辞 -a) の議論が主流をなしてきた。そのような中で Gragg (1968) が生成文法を用いて関係詞節構文を統語論から説明を試みた後、議論は、シュメール語の二つの名詞 (lu2 “man” と nig2 “thing”) が関係代名詞の機能を果た

すかどうかという点に限られ、最近の研究には、先の Gragg の議論を繰り返す Alster の論文 (2002) と、先行詞が関係詞節の中にある可能性を示唆した Huber (2005) の論文があるにすぎない。

(2) シュメール語には、疑問代名詞 ana “what?” を用いた関係詞節もある。その存在については大多数の文法書の中で触れられていて、ana は英語の “whatever” “everything that”、あるいはドイツ語の “das” “was”、フランス語の “(tout) ce qui/que” に相当するという説明が与えられている。しかし、その構造については、どの文法書にも言及がない。

以上のことから明らかなように、2~3 の研究を除くと、シュメール語関係節は、統語論の見地からはあまり研究されてこなかった、という背景がある。

## 2. 研究の目的

今回は、(1) lu2 “man” と nig2 “thing” を含む一般的な関係詞節、(2) ana を含む関係詞節、および (3) 関係詞節をめぐる語順、に焦点をあて、下記のような目的を設定した。

### (1) 一般的な関係詞節

① 収集したデータから構文の類型化を試みる。

② 関係詞節にしばしば先行する名詞 lu2 “man” と nig2 “thing” の機能を明らかにする。

### (2) ana を含む関係詞節

① 該当する関係詞節の意味と構造を組織的に調べ分類し、その類型化を試みる。

② 自由関係詞節 (free relatives) との比較考察を行う。

### (3) 関係詞節をめぐる語順

① 関係詞節の構成する名詞句が先行詞の前に置かれる構文の類型化を試みる。

② 左方転位 (left dislocation) と解釈できるかどうか考察する。

## 3. 研究の方法

(1) デジタル化されたシュメール語の文学文書 (<http://etcsl.orinst.ox.ac.uk/>) と経済文書 (<http://bdtms.filol.csic.es/>; <http://cdli.ucla.edu/>) を用いてデータを収集する。サルゴン以前 (Presargonic) の時代の碑文については、D. R. Frayne, *Presargonic Period*, University of Toronto Press (2008) を、グデア碑文については、

D. O. Edzard, *Gudea and His Dynasty*, University of Toronto Press (1997) を用いる。

(2) 本研究は古代語を扱うものであるが、理論的枠組みとして、言語学の類型学の方法論 (Keenan 1985; Comrie 1989; Givón 1990 など) を用いる。

(3) 言語学における統語論の研究者であるベアトリス・サントリーニ (ペンシルベニア大学・言語学部) の協力を得る。なおこの研究協力関係は 2002 年にさかのぼる。

## 4. 研究成果

(1) 関係詞節にしばしば先行する名詞 lu2 “man” と nig2 “thing” を含む関係詞節を分析・類型化していくと、それらが先行詞として機能していることが明らかになり、関係代名詞と解釈する必要性はないと論じた。また、シュメール語は先行詞が関係詞節の中にある (head-internal relative clauses) とする説には同意しがたい、という結論に達した。

(2) ana を含む関係詞節は、自由関係詞節と称される関係詞節に関する最近の言語学の研究 (Izvorski 2000; von Stechow 2000 など) を用いて、それにきわめて類似することを示した。

(3) 関係詞節を構成する名詞句が先行詞の前に置かれる構文について、ベアトリス・サントリーニと議論を重ね、それは再述代名詞 (resumptive pronouns) を持たない左方転位ではないかという結論に達した。左方転位と話題化・題目化 (topicalization) については、シュメール語文法でいくつか新しい研究が出てきたところなので (Zólyomi 1996, 2005; Johnson 2010)、引き続き理解を深めて行きたい。

(4) 不定詞を含む従属節は「~するために」と翻訳されるのが常であったが、中には、縮約関係詞節 (reduced relative clauses) と解釈した方がよいケースがあることを明らかにした。なお、不定詞の分析はまだほとんどなされていないので、組織的に研究して行く予定である。

(5) 関係詞節の研究の副産物として、ウル第三王朝時代 (前三千年紀末) の裁判文書 (ditilla texts) に多用される「言う」と「確認する」という語の補文構造を分析し、その多くが従属構文 (hypotaxis) ではないものの、意味論的見地から並列構文 (parataxis) と見なされうることを示した。

今後、このような補文構造の研究も深めて行きたいと思う。

(6) 関係詞節の研究のもう一つの副産物として、従属節(関係詞節を含む)に-am6あるいは-am3というbe動詞から派生した拘束形態素が付加される構文を分析し、日本語の「のだ」構文に類似するのではないかという結果を得た。

(7) ペンシルベニア大学の研究者ベアトリス・サントリーニ、アンソニー・クロック、スティーヴ・ティニーの協力のもとに、シュメール語コーパスの第一段階(およそ100のグデア碑文を含む)が完成し、サーチが可能になった。現在、コーパス・サーチは、ウェブ・インターフェイス“Form for querying parsed text with Corpus Search”

(<http://csearch2.ling.upenn.edu/SUMERIAN/queryparsed.shtml>)、および、コマンドライン・インターフェイス(Corpus Search = CS)の2つの方法で実行可能である。その際に必要とされる注釈マニュアル、PPCS (Penn Parsed Corpus of Sumerian) : A Brief Introduction to the Syntactic Annotation System of the PPCS

(<http://psd.museum.upenn.edu/ppcs/ppcs-manual.pdf>)とタグ・リスト、List of tags (<http://psd.museum.upenn.edu/ppcs/ppcs-tags.pdf>)も、不完全ではあるが、存在する。今後も、このコーパス作りを前進させ、また、リサーチ・ツールとしてのコーパスの重要性を国内外の学会にアピールして行きたい。また、注釈マニュアルとタグ・リストは、報告者が数年前に作成したものであるため、改訂する必要がある。

(8) シュメール語文法研究は、これまで、シュメール研究者に限られていたが、シュメール語関係詞節に関するデータを一般言語学の研究者と共有する事ができた。この試みを継続・拡張して行きたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 7件)

① Fumi Karahashi, Beatrice Santorini, “Sumerian Relative Clauses with Anticipated Arguments: A Null Analysis,” in C. Woods and A. Stauder, eds., Linguistic Method and Theory and Languages of Ancient Near East, Oriental Institute (論文集), 査読無, 2012年発行予定, 掲載決定.

② Fumi Karahashi, “Non-Finite Clauses in Gudea Cylinder B, Revisited,” in Proceedings of the 55<sup>th</sup> Rencontre Assyriologique Internationale, 査読無, 2012年発行予定, 掲載決定.

③ Fumi Karahashi, “Relative Clauses in Sumerian Revisited: An Interpretation of lu2 and nig2 from Syntactic Point of View,” in H. D. Baker, E. Robson, and G. Zólyomi, eds., Your Praise Is Sweet: A Memorial Volume for Jeremy Black from Students, Colleagues and Friends, British Institute for Study of Iraq (論文集), 査読無, 2010, pp. 165-171.

④ Fumi Karahashi, “Some Notes on the Sentence Structure in Sumerian Royal Inscriptions of the Presargonic and Gudea Periods,” 中央大学文学部紀要・史学 55巻, 査読無, 2010年, 41-56頁.

[学会発表] (計 5件)

① Fumi Karahashi, “Change and Continuity: The Case of Sumerian Enclitic Copula -am6/3,” Rencontre Assyriologique Internationale, 2011年7月6日, ローマ(イタリア).

② Fumi Karahashi, “Hypotactic and Paratactic Complementation in Sumerian Ditilla Texts,” From the 21<sup>st</sup> Century BC to the 21<sup>st</sup> Century AD: The Present and Future of Neo-Sumerian Studies, 2010年7月22日, マドリード(スペイン).

③ Fumi Karahashi, Beatrice Santorini, “Sumerian Relative Clauses with Anticipated Arguments: A Null Analysis,” Linguistic Method and Theory and Languages of Ancient Near East, 2010年4月16日, シカゴ(アメリカ).

④ Fumi Karahashi, “Non-Finite Clauses in Gudea Cylinder B, Revisited,” Rencontre Assyriologique Internationale, 2009年7月8日, パリ(フランス).

⑤ 唐橋文, 「グデア・シリンダーBにおけるR-a-da再考」シュメール研究会, 2009年5月9日, 早稲田大学.

[その他]

ホームページ等

<http://psd.museum.upenn.edu/ppcs/>

<http://csearch2.ling.upenn.edu/SUMERIAN/queryparsed.shtml>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

唐橋 文 (KARAHASHI FUMI)  
中央大学・文学部・准教授  
研究者番号：80453679

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

(研究協力者)

Anthony Kroch (アンソニー・クロック)  
ペンシルベニア大学・言語学部・教授

Beatrice Santorini (ベアトリス・サントリーニ)  
ペンシルベニア大学・言語学部・講師

Steve Tinney (スティーヴ・ティニー)  
ペンシルベニア大学・中近東言語文化学部・教授